P-003

コロナ禍における北東北の保育園の幼児への遊びの影響

高橋　　亮、最上　玲子、伊東佐由美
岩手医科大学

遊びは幼児にとっては生活そのものであり、自由で自発的な活動で、ストレスの軽減の効果、さらには発達をもたらすものである。しかし、コロナ禍で制限を強いられていた子どもたちは、遊びを十分に行うことができない可能性ある。本研究を行った地域は日本の北東北地方であり、日本国内においては感染拡大が少なく、大規模な感染拡大を免れた地域であった。本研究では、このような感染拡大が比較的小規模で済んだ日本の地方都市における子どもの遊びに焦点をあてて、コロナ禍であることが遊びにどのような影響をもたらしたかを、保育士への調査から明らかにした。

調査は、北東北地域の保育士16名を対象に自由回答式アンケート調査を実施した。 コロナ禍になったことで、「よく行うようになった遊び」と「行わなくなった遊び」を自由記述にて回答を求めた。分析は質的研究手法により内容分析法を用いて分類した。なお、本研究は岩手医科大学看護学部倫理委員会の承認を得ている（N2021-12）。

コロナ禍において、よく行うようになった遊びは「一人遊び（折り紙、塗り絵、ブロック、パズル）」、「密にならない遊び（園庭での遊び、砂場遊び、虫探し、散歩）」、「会話のない遊び（ジェスチャーゲーム）」の3つのカテゴリーであった。一方、行われなくなった遊びでは「飛沫を伴う遊び（伝言ゲーム、歌を歌う、シャボン玉、誕生日会、ピアニカ）」、「接触を伴う遊び（手つなぎ遊び、おしくらまんじゅう、じゃんけん電車、みんなで散歩）」の2つのカテゴリーであった。

保育士はコロナ感染予防のため、他児とコミュニケーションを取ったり、触れたり、会話したりといった遊びを避け、個人で行う遊びが増やしていたことが明らかになった。遊んでいる子どもたちは、社会的スキルが向上し、不安やストレスが軽減される。しかし、パンデミックの間、幼児は他者と関わる遊びを行うことが難しくなっていたことがわかった。コロナ禍において遊びが制限される中であっても、社会性が育まれる遊びや活動的な遊びを提供できるよう工夫が必要である。

P-004

保育・教育機関を利用する「保護者の子どもの健康管理」に対する保育者の認識

寺薗さおり[1]、山口　桂子[2]
[1]埼玉大学
[2]日本福祉大学

【目的】
乳幼児期の子どもにとって家庭や保育・教育機関はセルフケアを学習する場である。しかし、集団保育の観点から保育者と保護者間における連携上の課題があり、保育者による保護者の子どもの健康管理に着目した支援の提案が期待される。今回、保護者の子どもの健康管理に対する保育者の認識を明らかにし、支援上の課題を考察することを目的とする。

【方法】
分析対象：保育・教育機関の管理職や看護師19名の自由記述。調査内容：園における保護者の子どもの健康管理に関する実態、困りごとまたは連携体制に関する内容。分析方法：逐語録をコード化、サブカテゴリ化、カテゴリし、考察した。なお、本研究は埼玉大学の倫理審査委員会の承諾を得た。

【結果】
保育者が認識する保護者の子どもの健康管理の実態として、＜コロナ禍による保護者の保健行動の向上＞から子どもの＜保健行動の向上＞がみられたり、保護者の＜健康に対する豊富な知識＞や＜健康保持に対する十分な理解＞から子どもに対して＜発育・発達に即した世話＞＜適切な体調管理＞や＜適切な健康教育＞をしていたりする姿が確認された。一方、＜共働き家庭＞が増加している中で、＜保護者のニーズを優先＞し、＜不適切な体調管理＞＜発達に即していない世話＞や＜不十分な危機管理＞等子どものニーズに応じていない世話や教育から子どもの基本的生活習慣や保健行動における＜自立の低下＞も確認された。保育者は支援時に保護者や子どもの様子を＜情報収集＞し、コミュニケーションを通して保護者に＜寄り添う＞中で＜信頼関係構築＞に努めながら＜情報共有＞や＜情報提供＞をしていた。一方、保護者の子どもの健康管理については＜個人差＞もあり、保育者は＜個別対応の難しさ＞や＜伝える困難感＞も実感していた。

【考察】
保育者の視点から、保育・教育機関を利用する保護者の子どもの健康管理は適切に実施されている家庭とそうではない家庭が二極化している状況が示唆された。また、保護者支援においてもアセスメントしながら実践している一方で保護者対応の困難さも確認された。これらの課題も踏まえ、今後は保育者による健康支援技術の構築を検討していく必要がある。

謝辞：本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）：課題番号: 22K02431）の助成を受けて実施した。

Presented by Medical*Online